

# 明学教授会の思想的破産

## 教授会の少数意見・その5

学年末もおしまつて卒業式を翌日にひかえた今日（三月二八日）の連合教授会において、若林学長は冒頭に発言を求め、二六日の理事総会で辞意表明を行なつたことを明らかにして、選出母体であつた連合教授会にその了承を求めた。四学部教授会からの辞職勧告決議を平然とうけ流していた学長のこの突然の退場は、昨年来の明学闘争にとって、まずはひとつ転回点となるはずのものである。まさにこの時点において私は、これまでの闘争の総括をかねて、明治学院大学教授（そしてまた、しばしば右翼体育会と結びついて、かれら全共闘のたたかいを分断し、阻害した民青自治会の対応もまた、全共闘がひき出した民青の正体暴露であり、全共闘のたたかいの正当性を立証するものだつた）。

### 全共闘による正体暴露

昨年四月以来、さまざまな兆候や事件が起つてゐたにせよ、「紛争」の直接の契機となつたのは一〇月八日の応援団・学友会学生による立看板破壊事件であつ

たが、その後の本館封鎖、ヘボン館封鎖、第二次本館占拠から機動隊導入において、「紛争」のエスカレーションの過程は、当初の立看破壊が指標していた問題をこえて、明学全共闘による闘争が全国的な大学闘争の本質の一環であることを証明した。

というのは、かれらの闘争過程がついにひきずり出したものこそ、学校当局に学校権力の暴力的正体であり、また、教授会なるものの反動的正体だからである（そしてまた、しばしば右翼体育会と結びついて、かれら全共闘のたたかいを分断し、阻害した民青自治会の対応もまた、全共闘がひき出した民青の正体暴露であり、全共闘のたたかいの正当性を立証するものだつた）。

いわゆる政治的言語から疎外され、だいたい公開の討論の場で発言することの不得手な私が、教授会で最初に発言したのは一〇月末になつてのことと、本館封

鎖をして内部を破壊した学生に対し、立看破壊の体育会系学生と同様に、断固とした処分をすべきだというベラン教授の発言に、思わず立って、「バリケード占拠は、たとえ物理的破壊がどうであれ、ひとつ確固とした思想表現であり、逆に表現の自由の破壊である立看撤去などと同列に論じて処分を行うなら、この教授会はついに反動的教授会と墮するだろう」という趣旨のことを、どもりながら述べたのだった。

思えばこの私の初発言は、バリケード占拠の物理的破壊こそその思想性の根柢であることを見落しているし、さらには、「教授会」がまだ反動的でないといふべき幻想をまぬがれていたなかつたといえる。

101

天沢退二郎

いないことにあるだろう。たしかに「紛争」の過程において、個人として誠実な態度と思考の持主であることの明らかに成了した数人、否、十数人の教師の存在を私は認めないわけではない。

しかし、それら誠実な、そしておそらく私などよりも深い洞察力の持主であるはずのそれらの先生方が、ついに「紛争」の渦中からぬけ出ることができず、「紛争」を私たちの「闘争」の方向へと導くおそれことができず、いるのを見るのはつらいことである。私とて「紛争」と「闘争」との間をうろうろしている中途半端な存在にすぎないが、そんな私さえラジカルに見えるというのも、誠実で洞察力のある先生方が、眞の悪玉たちといつしょに「紛争」のなかに巻きくるめられているからだ。

いま三月末の、「紛争」の新段階となるはずの時点における第一の問題点は、教授会が——というより教授各人が——自らの反動性・犯罪性に十分に気づいて

をしたのか。何をしようとしているか。

## 自己意識の欠如

四学部大学改革研究委員会第三回合同会議の名前で三月二十四日付で出された「大学改革について討議すべき項目(案)」と題する書きがある。大きく六項にわかれ、新しい大学のあり方、大学の構成と運営、教授会の改革、執行体制の改革といった題目に並べて、「学生の地位と権利」とある。「学生とは何か」を問題にしているわけだが、「教師とは何か」という項はまったく存在していない。自分たちの正体が何であつたかを鏡く学生たちに問われてきたのに、そのことを全く不間に付したまま『教授会の改革』やら何やらを討議してみて何になるのか?否、それは学生たちの闘いを無視し、否定し、葬りることになる以外の何ものでもない。

この「改革研究委員会」の設置が合同教授会で議されたとき、私は「ナンセンス」として反対意見を述べたが、単にナンセンスなどろか、これもまた犯罪的性格をおびてているというべきだった。

思えばコッケイなくらいに、教授会は自己意識を欠如しているのである。最初に私が、学長辞任がひとつの転回点となるはず』と書いたのも、この点に全き不信を抱いているからだ。この数ヶ月、ほとんど『紛争』のはじめから、学長批判は教授会のアリバイであり、とくに一・二四(後述)以来、学長辞任こそ

解決への第一歩であるという固定観念が教授たちの自己意識を催眠しつづけてきたのであって、じつは学長が代ってみても、何ひとつ解決のメドは立たないことが多いは子どもでもわかることだ。教授会が自らの正体に目ざめないかぎり、目ざめてもその正体に居直るかぎり、明学闘争は決して解決されないと恐れ、悪しき(收拾)によって学生たちの正当なたたかいを圧殺するのがオチであること

もまたあまりにも明らかだ。

否、いま私がいつたことはまだ十分でない。教授会にできることは、自らの正体に目ざめるにせよ、目ざめないとどうぞ、破産すること、これだけであり、さらには、破産していることをついに受容することである。

## 闘争のあしどり

明治学院大学の『教授会の少数意見』という本稿の基本主題にややこだわって、教授会への直接的な批判を恣意的に書きだしてしまったが、東大闘争や日大闘争のようにマスコミ・ミニコミに書きだしてしまったが、東大闘争や日大闘争とともに基底において共通し、全共闘のたたかいが単に学生だけのたたかいでなく、現状況下におけるあらゆる醒めた人間のたたかいを含んでいることを見てとらねばならない。

一〇月八日の立看事件は、それだけをとってみれば単純な問題のように見える。だがこの事件が契機となつて一気に闘争をエスカレートさせたについては、当然それだけの理由があり、のみならずその理由の本質はすでにこの『立看』そのものに内在していた。

### 『うそさむい風』

の現実体は、学生たちの自治活動、とにかく学内における政治活動への有形無形の妨害として、すでに私たちの目に見えるのがはじめていた。そしてその妨害が一部の学生の手で行われていたため、それらのものが当初私などの目からかくされていた。

■第一巻いよいよ発売  
新版マルクス選集 全4巻  
■第二、三巻好評発売中  
新書／各￥250・丁  
モスクワ日本語版  
65

ナウル

株式会社 神田神保町2-2  
TEL 264-0021

朝日ジャーナル

なんらかの形で今回の事件に加担していると判断せざるをえないこと』が重視されている。日本の私立大学の大部分にみられる学校当局と応援団・体育会系のこうしたつながりは、明学においても実に歴然としており、その物的証拠も、やがてヘボン館を占拠した全共闘によって発見・公表された。

しかし『立看』事件が明るみに出したのは、単なる学生の自治活動・表現の自由への侵害と、それへの学生部の加担といふことだけではない。この事件へ次々と対応することによって、学校当局と教授会とはそれぞれに自らの正体をあきらめにしていった。

### バリケードの思想

まず学生たちが要求したのは、当然へ大衆団交である。そこでの要求項目は『応援団解散』『学生部長の自己批判』といった、ごく直接的な反応の現れなどまつていたが、学長は团交をしめつけるしかにしていった。

げという固定観念から、決して團交を受けようしなかった。学長はついに今度の退陣表明にいたるまで、この固定観念を変えようとせず、大衆団交を頑強に拒否しつづけたが、この学長の固定観念の頑強さは、『学長があんなどから』といふかたちで教授会のかくれみのとして利用され、のみならず一方で全共闘の運動のもりあがりを皮肉なことに少なからず助けたのである。

学生自治への侵害に対したたかうといふ点が単純にメルクマールとなっていた時期には何とか共闘しているようにみえた民青自治会と全共闘とは、一〇月一一日の学生部占拠案否決の時点からはつきり対立し、その対立は一六日の全共闘により本館バリケード占拠によって決定的となつた。そのとき私は新聞会の学生と会つて、闘争形態としてのバリケード占拠は正しいが、時期尚早なのではないかといった、おぼえがある。

この第一次本館占拠が一日でつぶれ、とくにヘボン館占拠にいたつて、学生による学園のバリケード占拠が、單に闘争形態としてのみならず、思想表現として、それも攻撃的行動にあらわれた表現であり対立し、その対立は一六日の全共闘に認した(あえていえば、かれらも私も、この正当性を十分に学生大衆にアピールしえなかつたらみはある)。そしてこの全共闘の闘争は圧倒的に、次のような

他方で学生たちの要求をのめない部分は拒否し、のんでもいい部分についても、それをなしくずしにする天下り的な『改革案』を、なんとかつくりあげて先取りしてしまおうとする考え方である。それこの二つは現在も一貫している。それも当然で、この対応ぶりには、大学において本質的に大事なのは『建物』と『権威』による体制であり、学生は使用料を払つて『建物』を四年間だけ使用させてもらひ、『権威』にひたすら服すべきものとしか考へないという、典型的な現今

全共闘が自主的に退去したことだけをとつてみると私の時期尚早説があつたかにみえるが、いま資料によってその直前の経過をたどり直してみると、一五日

体を明らかにしたのである。

### 大學管理者の思考

まず、学校当局・教授会の対応ぶりの特徴は、全共闘がつきつけている要求項

目(これはすでに学長罷免、処分阻止を

ふくむ徹底的なものに高められていた)

一方で『封鎖』という状態を物理的・事務的になんとか收拾しようとは決してせず、とまともに対決しようとは決してせず、

・第二次本館占拠を可能にし、かつ正当化しえたかがよくわかる。

絶賛発売中! A5判 870円

### ■新旧文明交替の壮絶な一大ドラマ!

# 21世紀への マグナカルタ

—転換する文明と未来社会—

木 義 光 著

鈴 木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

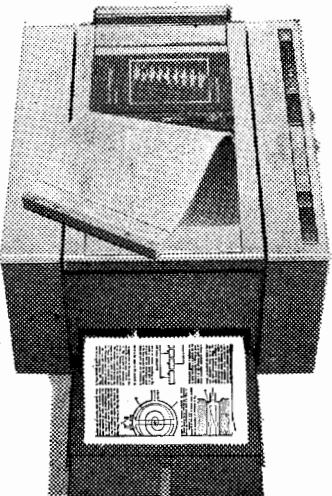
木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著

木 義 光 著</p

# いま、世界の国々が注目しています。 ミタの技術。



ご検討くださいましたか  
常に独創的な開発を続ける技術のミタ。その最新鋭機電子コピスター207は、いま、海に向こうでも大きな話題を呼んでいます。

**この性能で、この価格！**  
ボタンをポン——ハイできあがり  
＊所要時間は1枚10秒足らず＊自動給紙＊立体物も白地にくっきり＊青・黒・赤・茶、お望みの色に仕上げます＊特別の配線工事は不要。

ミタの技術の結晶  
**電子コピスター**  
**207**



正価 330,000円  
カートリッジ…7,500円 デスク…8,000円

三田工業株式会社

(本社) 大阪市東区宮林町5番(761)1171(大代) ④540  
(支店) 東京 (502)3151・名古屋・大阪・神戸・広島  
福岡  
カタログお送りします

の大学管理者の思考が露呈している。本館が占拠されれば、まず考えることは授業をどの建物でつづけるかということ。闘キ同(闘うキリスト者同盟)の学生たちがついにチャペルを封鎖したとき、緊急にひらかれた教授会でのキリスト教学の教授の最初の発言は、学生たちの真情との対決でなくて『礼拝の場所をどうにするか』であった! こういう管理的発想と、自分の『研究の場』がうばわれたことへのふんまんが結びつくとき、教授会『一般教師の思考と行動』とはついにファンスト的性格を露呈する。

二月三日、学外での連合教授会に学長が要請した『封鎖反対決議』が機動隊導入の根拠として使われるものであることが明瞭であったとき、私を含め数人の教師がそれぞれのいい方でそのことを強調して反対したのも、思えば茶番であった。ファンスト的存在たちはじつと黙っていた後に、『採決!』『賛成!』と叫

び、学長原案を可決したのである。

民青自治会はすでに第一次本館占拠のときから、その犯罪的な正体を明らかにしていた。体育会系の学生と声をそろえて『あの破壊のあとを見よ!』と一般学生によびかけていた自治会幹部は、次にヘボン館を占拠した全共闘を、これも体育会系と結んで逆封鎖・水攻めにし、さらに学校側の設定した『全学集会』をへヘボン館占拠への抗議集会にきりかえ、多数決で『実力撤去』をとりつけてバリケードに迫ろうとした。学長は一時は歓喜して『私が諸君の先頭に立って突っ込む』と叫んだのである。学校当局ー民青ーへ『一般学生』のファンスト的な結果を認めようとしない(私はくしかえし新議長团による大衆団交を受けるべきだ)と発言したが、他学部の同意見の教師に、あなたの言い方は学生側の論理と同じだから、逆効果だとつよく批判されたまま、一月二十四日に全快復帰した学長によって、ついに教授会自治をも否定されながら、んべんとして犯罪的入試に協力してしまうのである。

しかし、そのとき多数決で勝ったはずの民青執行部と行動をともにしようとしたが多くの残っているのに枚数が尽きようとな

している。二月八日の機動隊導入に対し、何らたたかわなかつたどころか、陰険にそれを支えてきた教授会の中の單なる(異分子)であることから、私はさらにはさきへ自己を乗越えねばならない。不當にも学外へ追われ、学生大衆とのコミュニケーションを引きかれた全共闘に立たされているが、攻撃的なバリケードの思想表現性と、物理的ゲバルトを文えるラジカリズムによつて、自己を深化し、闘争を徹底的につきすすめねばならない。

教授会は国家権力と学校権力との結合に加担することをやめて自らの破産を認め、全共闘の要求項目をすべて受けねばならない。学生大衆は『一般学生』といふ虚像のなかにひそむファンスト的因素、ひとりひとり主体的に対決し全闘連を支えてたたかわなければならない。